博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第22集

平成30年3月

二松學舍大学

はしがき

この冊子は、学位規則（昭和28年４月１日文部省令第９号）第８条の規程による公表を目的として、平成29年度本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

目　次

学位の種類等	学位番号	氏　名	学 位 論 文 題 目	頁
博士（文学）	甲第54号	楊　爽	依田学海研究－漢文小説を中心に－	1
博士（文学）	甲第55号	藤田　拓海	陸法言『切韻』研究	9
博士（日本漢学）	甲第１号	武田　祐樹	林羅山の学問形成とその特質 —古典注釈書と編纂事業を中心に	15

博士学位論文審査報告書

題目	『依田学海研究－漢文小説を中心に－』		
氏名	楊爽		
論文審査委員	主査	教授	江藤　茂博
	副査	特別招聘教授	稲田　篤信
	副査	教授	山口　直孝
	副査	教授	町　泉寿郎

論文目次と内容の要旨

本学博士後期課程在籍学生楊爽の学位申請論文は、『依田学海研究－漢文小説を中心に－』として370pA4版の装丁で提出された。目次は以下の通りである。

序章　1

第一節　漢字文化圏と漢文小説

第二節　依田学海の生涯と著述

第三節　研究史と本論の構成

第一編　白話体作品の意義　9

第一章　漢文白話体小説の書き手「秋風道人」とは誰か－依田学海の創作活動の一面

第一節　秋風道人とは－『東京柳巷新史』から出発

第二節　『花月新誌』における秋風道人－先行研究への疑義

第三節　『当世新話』と秋風道人

おわりに

第二章　依田学海における白話小説の試み－秋風道人「新橋佳話」の写実と寓意－

第一節　「新橋佳話」の概要

第二節　「新橋佳話」の表現

第三節　「新橋佳話」の風刺の意味

おわりに

第二編　文言体作品の特色　42

はじめに
第一章　評伝から漢文小説へ－依田学海『譚海』にみる『名家略伝』の翻案方法－
第一節　山崎美成に関する先行研究
第二節　山崎美成の自序文からみる『名家略伝』
第三節　『名家略伝』に取材した諸作品
第四節　「田中丘隅」について
第五節　「風外」と「風外禅師」
第六節　『賣酒郎』をめぐって
おわりに

第二章　依田学海の『蝦夷風俗彙纂』受容－「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠を中心に－
はじめに
第一節　「蝦夷三孝子二貞婦」と『蝦夷風俗彙纂』
第二節　「蝦夷三孝子二貞婦」と「ベロ　龜松」
第三節　「蝦夷三孝子二貞婦」と「アベハナ」
第四節　「蝦夷三孝子二貞婦」と「孝多」
第五節　二貞婦の話について
おわりに

第三章　『譚海』における漢文体「実録物」の受容と変容－「孝義復讐」を事例として
はじめに
第一節　竹内楊園について
第二節　関連資料から見る『東毛復讐始末』
第三節　『東毛復讐始末』の作品構成について
第四節　『東毛復讐始末』と「孝義復讐」
おわりに

第四章　依田学海の「合伝」方法－『譚海』にみる『百家琦行』の受容
はじめに
第一節　岳亭五岳と『百家琦行』
第二節　『譚海』にみる『百家琦行』の諸作品
第三節　『譚海』における「合伝」の様相
第四節　「奇僻」にみる学海の「合伝」方法
おわりに

第三編　作品の影響　177

第一章　近代における漢文小説の「還流」－依田学海『譚海』と『東海遺聞』の関係を中心に
はじめに
第一節　先行研究
第二節　先行研究に対する疑問と問題提議
第三節　『東海遺聞』の出典
第四節　『譚海』とその時代
第五節　「天下才子必読・漢文絶妙編」について
おわりに

第二章　依田学海『譚海』の海外への影響をめぐって
　　－常熟図書館所蔵稿本『海客談瀛録』
はじめに
第一節　徐兆瑋について
第二節　徐兆瑋の日本留学の経験
第三節　徐兆瑋と漢文小説
第四節　『海客談瀛録』の作品出典及び編集状況
おわりに

付論　依田学海と『聊斎志異』－「小野篁」と「蓮花公主」との比較研究を中心に－　240
はじめに
第一節　「小野篁」と『聊斎志異』との対訳
第二節　「小野篁」と「蓮花公主」との比較
第三節　「小野篁」に対する同時代評
おわりに

終章　284

資料編　「依田学海序文」集　289

主要参考文献　355

初出一覧　370

内容の要旨は以下の通りである。

序章では、漢字文化圏としての近代日本文化、そうした文化のなかでも近代日本文学史においては漢文小説があまり評価されることがなかった状況、そうした漢文小説の書き手である依田学海の生涯が紹介されている。

第一編は、依田学海の白話体漢文小説についての考察である。

第一章では、依田学海が秋風道人の号を使ったことを確認して、成島柳北が主宰する『花月新誌』に掲載されていた「新橋佳話」、「七湯清話」を、学海の白話体漢文作品を新たに特定している。第二章では、「新橋佳話」を取り上げて、時事的な風刺とともに、依田学海の演劇観を読み解く。学海が白話体漢文小説を「手がけていたことの持つ意味は大きい」としている。

第二編は、学海の代表的な作品『譚海』を中心に、文言体漢文小説に関する考察である。

第一章では、『譚海』と底本『名家略伝』とを比較することで、「工夫を凝らし漢文体小説に仕立て上げる学海の記述姿勢」を明らかにした。以下、同様な研究方法で、第二章では、「蝦夷三孝子二貞婦」とその「粉本」から、「作品の史実性・時代性を希薄にし、作品の表現を平易化にしたうえ、人物を本筋としている特色がある」とする。第三章では、学海の「孝義復讐」と典拠である竹内楊園『東毛復讐始末』とを比較し、作品の「文芸性」＝フィクション性を指摘している。第四章では、『譚海』と粉本「百家琦行伝」とを比較し、『譚海』では、『史記』の「合伝」という表現方法に拠ったことを指摘し、「近世の評伝作品に新しい可能性を与えた」とする。また、近代以前の漢文小説との差異を指摘しながら、その近代化された漢文小説として依田学海の小説を指摘した。

第三編は、『譚海』を始めとする依田学海作品の外国文表現文化への影響を論じたものである。

第一章では、依田学海の『譚海』と村山自彊の『天下才子必読・漢文絶妙編』が、明治期中国人留学生たちの手によって、中国にもたらされ、さらにリライトされて、『東海遺聞』が成立したことを論証した。第二章では、同じく、中国にもたらされ、リライトされた徐兆瑋の未刊小説集『海客談瀛録』を取り上げ、徐の日記の記述を基に、それが依田学海『譚海』と菊池純『本朝虞初新志』に拠るものが採られていることを、実証的に示した。これらの作品の存在は、「文化還流」とし、「日中文学・文化交流を論じる上で重要な資料」だとする。そして中国における「近代小説の確立期」での、漢文小説の形態が、日本文学との相互関係をもたらしたという事実を指摘した。

付論は、『新著百種』に掲載された依田学海『小野篁』が、その典拠とした中国古典作品『聊斎志異』の「蓮花公主」との異同に着目して、新しい作品として再構成していく学海の「独自」の方法には、近代小説としての評価も与えることができるとした。

結論は、依田学海の翻案という仕事は、その方法や影響から考察しても日本文学の近代化へ貢献した評価すべき漢文小説であると論証されてきた本論を、再度ここで整理されている。

資料編は、他の書き手の書物に「序文」として書かれた依田学海の文章を翻刻し集めたもの 101 篇。地道な努力による資料集となっているが、まだこれを使った研究までは及んでいない。

論文審査結果の要旨

依田学海は、役人の経歴を持ちながら、漢文小説の作家、文芸評論家、漢文教育者として 19 世紀末に活躍する。近代日本の文学が向かった「言文一致」のリアリズム小説への方向は、漢文小説の書き手を求めなくなった。それどころか読者もまたそこに用意しなくなった。なぜなら、教育制度のなかで、漢文教育は中等教育のひとつの教科に位置づけられたからである。そして、近代日本は知識人としての素養を、西欧文化から得ること力が向けられる。そうした時代の教養文化のいわば転換期に生きた依田学海とその仕事は、その後の近・現代日本の表現文化史からは留意されなくなった。博士論文「依田学海研究－漢文小説を中心に」は、従来の文学史的な視座からは評価・位置づけが不十分であった、依田学海の作品を漢文小説とし、その典拠とを関係を中心とした研究である。特に、典拠となった先行作品と依田学海の作品を比較検証することで、学海の創作方法の顕在化と意味づけ、さらに学海作品に対する文学史、日中文化交流史、メディア史における評価・位置づけが試みられている。こうした分析に加えて新たな資料の発掘も含めて、提出された論文は、博士論文として十分な内容を持つものである。

1　論考の構成

本論文の全体は、大きく第一、第二、第三篇と分かれている。「第一編　白話体小説の意義」では、依田学海の執筆活動の幅の広さを実証するとともに、明治 10 年の作「新橋佳話」を取り上げて、その表現方法においては戯曲脚本のそれに近い方法を指摘。「第二編　文語体作品の特色」では、依田学海の表現方法について、具体的な作品を取り上げて検証。「三編　作品の影響」では、東アジア漢字文化圏における『譚海』の海外流布とその影響を、尹蘊清『東海遺聞』と徐兆瑋の日記から検証。いずれも、依田学海の漢文小説の方法とその影響について東アジア漢字文化圏のなかで捉えた論であり、その指摘する事柄はいずれも傾聴するに値するものである。さらに「付論」として、今度は逆に、依田学海における

『聊斎志異』受容の問題を取り上げていた。また、付録の「資料」は、「依田学海序文集」として、学海が書いた「序文」を収集翻刻 101 作が集められている。本論文は、対象としては、依田学海の膨大な仕事の中の、特に『譚海』に焦点を置いて、依田学海の創作表現の方法と中国文化との関係とを実証的な方法で明らかにしたものである。

2　論考の特色

本論考の特色は、まず、全体を通しては、依田学海の作品に対する典拠と執筆された作品との関係を実証的にその軌跡を明らかにするという方法を採ったことである。この方法によって、依田学海の創作の表現力学とその構造が言語化されることになったのである。このことは高く評価できる。つまり、従来研究の深化がなかなか進まなかった依田学海及び漢文小説に対して、作品とその出典等との実証的に比較することでの調査分析によって、学海の具体的な創作方法が明らかになり、語句表現を対象とするより具体的な典拠受容と表現の関係がここで明らかになったからである。

また、実証的な調査のなかで、従来は依田学海の著作とされていなかった学海の文章の発見、さらには依田学海の仕事として対象化されてこなかった「序文」の収集を通して、新資料紹介を付したのは、さらに今後の研究に結びつくものとして高く評価したい。

3　論考の視座と分析

第一篇の第二章では、特に、「新橋佳話」を取り上げて、その世相についての批評性、元明の白話文体的表現による漢文小説の表現の可能性追求などの指摘は、かなりの説得力を持つものである。

第二編では、典拠とした評伝『名家略伝』を依田学海がいかに受容し、漢文小説に組み替えていったのかを、①他の「材源」を加えたパターンとして「田中丘隅」「小萬」②「奇」の「部分」を「強調」して「趣向を優先」させたパターンとして「風外」③和製漢語による表現工夫として「売酒郎」と指摘した。こうした細かに指摘された分類は、組み換え主体である依田学海の創作意図を読み取ることができると共に、そこに近代的な作家主体を想定することができるのである。特に第四章では、依田学海『譚海』の材料とした岳亭五岳『百家琦行伝』からの具体的な受容から、『史記』の「合伝」という方法を取り入れたことを実証しながら、そこで使われた文体と共に、学海の近代文化に対する方法的な対処の姿を見るのであった。論者は、近代作家としての面を依田学海に求めようとしているが、この典拠との関係において浮かび上がるのは、まさに近代作家としての依田学海の姿であったと納得できる。

第三篇では、東アジア漢字文化圏という視座から、依田学海の作品の国内外での広がりを、新聞広告等のメディア論的分析、中国での出版物への伝播等への書誌的分析により、明らからにしたことを評価したい。ここでは、尹蘊清が『東海遺聞』を出版するにあたり、その底本としたものが、『譚海』と村山自彊編『天下才子必読・漢文絶妙編』の二書だった

ということを実証していく。そして、こうした事例を、「明治期の日本漢文小説の海外への流布状況を示す好例」だと見たのである。また、徐兆瑋の日記の記述を参照しながら、『海客談瀛録』とその出典となった『譚海』の入手経緯、それと出典からの再編状況の検証による、編集意識の顕在化、そしてそれらに見て取れる日中の文化交流を指摘している。そして、そうした現象が生まれた理由として、当時の中国留学生人の目から見た、漢文小説の近代性を論者は指摘している。

4　論考の可能性

こうした『譚海』を中心とした実証的な分析は、依田学海研究の新しい展開と学海作品への新たな評価を生むものであると考えられる。一つには、日中文化交流史における、具体的な「交流」が、この『譚海』が採集した典拠とした中国の作品との関係、逆に『譚海』を典拠とした中国の作品との関係が、その様相を示しているという指摘である。ここから、さらに日中文化交流史の具体的な姿が検証されていくことになると思う。それは、漢文小説というジャンルの特性を照射することにもなる筈だ。さらに二つめとして、漢文小説の近代性を指摘されていることから、これまでの言文一致系小説とは別の枠組みでの近代小説の系譜が構築できるのではないかという可能性を予感させる研究でもある。また、三つめとしては、東アジア漢字文化圏という視座から、依田学海の作品の国内外での広がりを、新聞広告等のメディア論的分析、中国での出版物への伝播等への書誌的分析による論考を実証的に組み立てたことである。ここには、漢字文化圏という文化的な広がりとメディア研究とを結びつけた、あらたな研究領域が提出されている。こうした三つの研究領域の可能性が、この一連の研究からもたらされたものである。

5　おわりに

依田学海研究には、漢文学の知識の必要性が求められることで、近代日本文学研究が用意した原理と結びつきにくく、早くは大正期から現代日本文学の領域から排除されてきた。すでに、日本文学史の概説書からは、近代日本の漢文小説は、その存在すら消されてしまうことがままあったのである。こうした忘れさられようとしている文芸領域を、外部的な視座からとらえ直し、さらには依田学海の書物を通じた日中の文化交流の具体的な場面を提出できたことは、本博士論文の特色であり、論者の力量によるものであり、今後の研究も大いに期待できる。

問題点としては、一、同時代の文学者の仕事との比較が乏しく、論者の訴える学海の独自性が必ずしも説得的に伝わらないところが挙げられる。二、『小野篁』については小金井きみ子『皮一重』と照らし合わされているが、それ以外の章においては同じ手続きが見られない。三、『譚海』については、やはり菊池三溪『本朝虞初新誌』との比較考察などを展開された方が学海文学における異種混合性が一層際立たせることができたと推量される。四、さまざまな創作活動を行った依田学海という文人のなかでの漢文小説が持った意味が

どのようなものであったのかについては、ほとんど言及されていない。これらに関しては今後の考察に期待したい。

上記のような課題はあるものの、学海および近代漢文体小説の位置づけを実証的な手続きで明らかにした本論文が意義深いものであることは確かである。本審査委員会は、本論文が「博士（文学）」（甲）の学位に値するとの結論に達した。

博士学位（甲）論文審査報告

題　　目	陸法言『切韻』研究		
氏　　名	藤田　拓海		
論文審査委員	主査	小方　伴子	本学文学部教授
	副査	野間　文史	本学文学部特別招聘教授
	副査	森野　崇	本学文学部教授
	副査	佐藤　進	北海道文教大学教授

論文内容の要旨

本論考が対象とする陸法言『切韻』（601 年、逸書）は、全体像をうかがい知ることのできる中国最古の韻書（詩を作るための韻引き字典）である。論者の研究計画の最終目標は、この『切韻』の復元にある。

本論考は、『切韻』の復元のための前段階作業として、主要な先行研究のひとつである李永富『切韻輯斠』（1973 年刊行）の復元結果に、全面的な修正を施したものである。構成は以下の通りである。

序章

1　緒言　　2　陸法言『切韻』　　3　切韻系韻書

4 凡例　　5　本論文の構成

第 1 章　『切韻』残巻研究史

はじめに

第 1 節　出土残巻と伝世残巻

第 2 節　残巻の紹介と研究

第 3 節　テクストと判読

第 4 節　残巻の分類とその特徴

第 5 節　陸法言『切韻』復元の試み

おわりに

第 2 章　『切韻』各論

はじめに

第 1 節　切韻残巻各説

第 2 節　陸法言『切韻』復元の方法

第 3 節　『切韻』に於ける増補と省略

第４節　『切韻』諸本と音類
おわりに
第３章　切韻注
はじめに
第１節　平声
第２節　上声
第３節　去声
第４節　入声
おわりに
終章
参考文献
付論「「乾（カン）」「乾（ケン）」字考」
付表「切韻表」
付表「切韻残巻対照表」

序章

1「緒言」では、韻書の歴史、『切韻』の成立、切韻系韻書（『切韻』の体系を受けついだ増補改訂本）の発展、『切韻』の研究史、『切韻』の復元研究の概略を紹介する。また、中国学と『切韻』との関係、日本語音韻史、日本漢字音、日本古辞書と『切韻』との関係についても述べる。2「陸法言『切韻』」では、『切韻』の概要を述べ、本論考で用いるタームについての説明を行っている。3「切韻系韻書」では、現存する韻書の序文、図書目録の記載などから確認される切韻系韻書の種類及び撰者を一覧にまとめている。4「凡例」では、本論考で用いる字体、記号、略称などを解説している。5「本論文の構成」では、論文全体の章立てを示し、各章及び付論・付表の概要を述べている。

第１章　『切韻』残巻研究史

第１節「出土残巻と伝世残巻」では、現在公開されている残巻を、①出土残巻（20 世紀初頭に敦煌及びトルファンで出土した残巻）と、②伝世残巻（古書店及び北京の故宮で発見された残巻）とに分け、各残巻の発見時の状況、所在、名称、整理番号などを記述する。なお、1947 年に故宮で発見された王仁昫『刊謬補缺切韻』は完本であるが、本論考では論述の便宜上、「残巻」に含める。

第２節「残巻の紹介と研究」では、切韻系韻書の残巻（以下、「切韻残巻」と称す）の研究史を５期に分けて論じている。第１期は劉復・羅常培・魏建功『十韵彙編』（1936 年刊行）まで、第２期は姜亮夫『瀛涯敦煌韻輯』（1955 年刊行）まで、第３期は上田正『切韻残巻諸本補正』（1973 年刊行）までで、いずれも残巻研究に於ける重要な書籍の刊行を区切りとする。第４期は、1973 年から 2000 年まで、第５期は 2001 年から現在までである。

第 3 節「テクストと判読」では、切韻残巻のテクスト及び判読に関する先行研究を取り上げる。残巻のテクストには、原本、写真（影印本）、筆録本（模写本）の三種類がある。初期の研究には筆録本をテクストとしているものが多く、誤読などの問題がある。本節では、それらに訂正・補足を施した研究、残巻テクストの扱い方を論じた研究を紹介する。

第 4 節「残巻の分類とその特徴」では、上田正『切韻残巻諸本補正』の切韻残巻の分類区分を取り上げる。『切韻残巻諸本補正』は切韻残巻を、①陸法言、②初期、③長孫納言、④王仁昫、⑤中期、⑥唐韻、⑦大唐刊謬補缺切韻、⑧孫愐序切韻、⑨晩期の 9 グループに分類する。本節では、各グループに属する残巻の特徴を論じている。なお、本論考の残巻の分類区分は、『切韻残巻諸本補正』に従っている。

第 5 節「陸法言『切韻』復元の試み」では、『切韻』の復元を試みた李永富『切韻輯斠』、上田正『切韻諸本反切総覧』（1975 年刊行）を取り上げる。両者の復元範囲などを比較し、それぞれに対する近年の批評を紹介し、本論考が『切韻輯斠』を修正する理由及び意義について述べる。さらに、『切韻輯斠』の問題点を 4 項目にまとめ、各項目に対する解決法を提示する。

第 2 章　『切韻』各論

本章では、第 3 章で行う『切韻輯斠』の修正作業に先立ち、切韻残巻の分類区分、『切韻』の復元方法など、『切韻』の復元作業に直接関わる問題について論じる。

第 1 節「切韻残巻各説」では、切韻残巻の分類区分について、本論考で採用する上田正『切韻残巻諸本補正』以外の説を紹介し、上田氏との相違を示す。次に、残巻の分類には特有の難しさがあることを、異論の多い残巻 P3696（「P3696」は残巻の整理番号）を例に論じる。最後に、本論考で用いる残巻を、『切韻残巻諸本補正』の区分に従って分類する。分類に於いては、残巻ごとに関連する先行研究を挙げ、検討を加えている。

第 2 節「陸法言『切韻』の復元方法」では、『切韻』の復元方法を、実例をもとに論じる。また、復元が困難な例を示し、『切韻』の復元、とくに注文（反切・字義・同音字数などの記述）の復元には、限界があることを、具体例を挙げて述べる。

第 3 節「『切韻』に於ける増補と省略」では、切韻残巻に於ける増補・省略に関する問題を論じる。本論考に於ける残巻の分類区分は上田正『切韻残巻諸本補正』に従うが、個々の残巻の分類については、上田氏を含む先行研究に問題のあるものが少なくない。残巻の分類が変われば、それにもとづいて行われる復元の結果も変わってくる。本節では、『切韻残巻諸本補正』などが、原本『切韻』由来とする字句の中に、後の増加とみなしうるものがあることを、具体例を挙げて指摘する。また、『切韻残巻諸本補正』などが、『切韻』の増補過程で元からあった収録字が脱落したと判断する文字についても、判断の基準となる残巻の分類如何によっては、原本『切韻』には元からなかった可能性があることを指摘する。

第 4 節「『切韻』諸本と音類」では、切韻系韻書に於ける異同のうち、音韻史に関わって

くるものを取り上げる。中古音研究では、『切韻』の代替として『広韻』を用いるのが一般的である。しかし両者（及びほかの切韻系韻書）には、反切の相違や小韻（同音の文字のグループ）の有無など音韻史に関わる異同がある。本章では、それらについて、具体例を挙げて論じる。また、切韻残巻及び『広韻』の記載に異同がなくても、研究者の音韻学的解釈の違いによって、小韻の分類が異なることがある。本章では、それらについても論じている。

第3章　切韻注

本章では、『切韻輯斠』の修正作業及びその結果を記述する。『切韻』の構成（平上去入の四声ごとに同じ韻字を集めて分類）に従って全4節（第1節「平声」、第2節「上声」、第3節「去声」、第4節「入声」）に分け、さらに韻目ごとに小節を設ける。各小節の冒頭に、それぞれ参照できる残巻を一覧表で示し、『切韻輯斠』の復元に疑義のある字句を含む小韻を順次取り上げ、修正作業を加える。修正作業は、①諸本（切韻残巻及び『広韻』）に共通する字句は原本『切韻』由来のものとみなす、②諸本に異同のある場合は、より古いものを原本『切韻』由来のものとみなす（ただし例外もある）という基本原則にもとづいて行う。ただし、小韻の有無については、上田正『切韻諸本反切総覧』に従う。

本論考の修正によって削除・追加された正文（見出し字）は、121字（削除63字、追加58字）である。正文の総数は、『切韻輯斠』の11163字から11158字に修正された。また、全体の6%に当たる678字には、字体の修正が行われている。さらに注文では、全体の16%に当たる1819条（ε の有無、上田正『切韻諸本反切総覧』に基づいた小韻反切の変更も含む）に修正が加えられている。

終章

本章では、本論考の概要をまとめ、『切韻』復元研究に於ける今後の課題を述べる。具体的には、①『切韻』の逸文資料の研究、②原本系『玉篇』の研究（王仁昫『刊謬補缺切韻』はおもに原本系『玉篇』によって増補されている）、③上田氏の分類区分及び復元結果の検証などである。さらにその先の課題として、『切韻』研究の成果をもとにした音韻史研究、漢字音研究を挙げる。

付論「「乾（カン）」「乾（ケン）」字考」

本付論は、残巻整理の過程でまとめられた論考である。一般には異体字の関係にあると見なされている「乾」「乾」の二字が、主として唐代には、「乾」を「カン（平声寒韻見母）」に、「乾」を「ケン（平声仙韻群母）」に用いるという区別があったこと、すなわち形・音・義が異なる別字として機能していたことを指摘し、それが科挙制度の整備などにともなう異体字整理によって統合されていった過程を検証している。

付表「切韻表」

本付表は、各小韻の①音類、②利用できる残巻及びその字句、③『切韻輯斠』の推定する字句、④本論考の推定する字句を一覧表にまとめたものである。本論考の修正作業は②を参照資料として行われている。④は本論考第三章の修正結果を記したものである。「切韻表」は全体で336頁に及ぶ。

付表「切韻残巻対照表」

本付表は、各種残巻の残存状況・著書収録状況をまとめたものである。

審査結果の要旨

前述したとおり、本論考が対象とする陸法言『切韻』は、全体像をうかがい知ることのできる中国最古の韻書である。唐から北宋にかけて、その体系を受けついだ種々の増補改訂本（「切韻系韻書」と総称される）が流行し、押韻の規範とされた。原本『切韻』は早くに失われたが、切韻系韻書のひとつである『広韻』（1008年）が今日まで伝わっている。

『広韻』は『切韻』の音韻体系を保っていることから、清朝以降、『切韻』の代替として古代中国語音の研究に利用されてきた。『広韻』を用いた古代中国語音の研究は、20世紀になると、近代言語学の理論にもとづいた中古音（狭義には『切韻』から帰納される音韻体系を指す）の研究へと発展していく。

一方、20世紀初頭には、敦煌やトルファンから切韻系韻書の残巻が発見され、1947年には、北京の故宮で『切韻』の増補改訂本のひとつである王仁昫『刊謬補缺切韻』（写本）の完本が発見される。

1970年代には、原本『切韻』の復元が試みられるようになり、その成果である李永富『切韻輯斠』、上田正『切韻諸本反切総覧』が刊行される。両書は切韻残巻、『刊謬補缺切韻』（完本）、『広韻』などを用いて、原本『切韻』の復元作業を行っている。李永富『切韻輯斠』の復元作業は、注文も含む全体的なものであるが、精度が低いという欠点がある。上田正『切韻諸本反切総覧』の復元作業は、精度は高いが全体的なものではなく、中古音研究に直接関わる部分（小韻首字、反切など）に限られている。

論者の研究計画の最終目標は、李永富『切韻輯斠』、上田正『切韻諸本反切総覧』の成果を踏まえて、より精度が高く、かつ全体的な『切韻』の復元を行うことにある。現在は、インターネット上に切韻残巻の詳細な写真が公開されており、李永富『切韻輯斠』、上田正『切韻諸本反切総覧』以降に発見された残巻もある。また、『切韻』をめぐる文献学的研究も進んでいる。論者の研究計画は、このような『切韻』関係の資料の充実、研究の進展に応じたものである。

『切韻』の復元作業は、本来の研究方法からいえば、現存する完本である『刊謬補缺切韻』を底本としてなされるべきものである。しかし現状の研究の広がりや深まり、研究条

件や環境を見渡してみると、それを一から行うには膨大な時間が必要である。そこで論者は、そのための前段階作業として、先行研究のひとつである李永富『切韻輯斠』が公にした復元結果に、近年の研究情況にもとづいて、全面的な修正を加えることにした。『切韻輯斠』の修正は、論者の研究目標を達成するために、避けて通ることのできない重要な前段階作業に位置づけられる。本論考の目的及び意義は明確であり、「博士論文」（甲）の課題として充分なものであると判断する。

第１章では、切韻残巻の発見史及び研究史を、年代順に要領よくまとめている。『切韻』の復元については、主要な先行研究である李永富『切韻輯斠』と上田正『切韻諸本反切総覧』とを比較検討し、本論考が『切韻輯斠』の修正を行う理由、『切韻輯斠』の問題点及びその解決法を明らかにしている。

第２章では、第３章で行う『切韻輯斠』の修正作業に先立ち、切韻残巻に関連するさまざまな問題を取り上げている。切韻残巻の分類整理は、それそのものが重要な研究課題である。本論考では、残巻の分類区分は上田正『切韻残巻諸本補正』に従うが、異説についても充分な検討がなされている。また個々の残巻の分類については、先行研究を踏まえた詳細な検討を行っている。本章第１節 1.3「残巻各説」に於ける残巻及び先行研究に関する記述は、『切韻』の文献学的研究にとって有用な資料となっている。

第３章「切韻注」では、『切韻輯斠』の推定に疑義のある字句を小韻単位で取り上げ、修正を施している。修正作業は、第３章の冒頭に記した原則に従い、付表「切韻表」の残巻一覧を参照しながら行っている。項目ごとに利用できる残巻や先行研究を挙げており、資料としての価値も高い。

本論考に於ける修正を経て、『切韻輯斠』は、論者が求める形、すなわち「本来の方法によって復元されるべき陸法言『切韻』に対する一種の鏡像」（序論９頁）としての役割を果たすに足る形となった。論者は今後、王仁昫『刊謬補缺切韻』を底本として、厳密な方法論に従って、『切韻』の復元作業を行う計画である。本論考の成果は、その際に利用されるべきものである。

切韻残巻の蒐集、判読、整理、分類には、膨大な時間と労力を要する。本論考では、現存する残巻を可能な限り蒐集し、残巻間の関係を整理し、関連する先行研究を調査し、詳細な検討を加えており、それ自体が、『切韻』研究に於ける有用な資料となっている。論者の資料蒐集・資料整理の能力は、研究者として高く評価されるべきものである。付論「「乾（カン）」「乾（ケン）」字考」（『日本中国学会報』第66集）は、第11回漢検漢字文化研究奨励賞（佳作）を受賞している。

本論考の目的である『切韻輯斠』の修正は、ほぼ達成されている。先行研究の調査、分析、残巻の蒐集、整理は尽くされており、残巻整理の過程で得られた論考も優れたものである。本審査委員会は本論文が「博士（文学）」（甲）の学位に相応しいものと判断する。

博士学位論文審査報告

題目：林羅山の学問形成とその特質―古典注釈書と編纂事業を中心に

氏名：武田祐樹

論文審査委員：主査　教授　町　泉寿郎
副査　特別招聘教授　市來津由彦
副査　教授　牧角　悦子
副査　特別招聘教授　稲田　篤信

論文内容の要旨

林羅山が江戸時代の漢学に大きな足跡を残した存在であることは衆目の一致するところであるが、本論文は林羅山の学問の形成とその特質を明らかにすることを中心課題として、その学術史上における意義を良質な一次資料の吟味や時代背景の的確な理解等を通して、より丁寧かつ正確に見定めようとしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

目次

序論　（1）問題の所在　（2）従来の日本漢学研究における林羅山
（3）問題設定とアプローチ　（4）論文の構成

前編　慶長から寛永前半にかけての林羅山と古典注釈
第一章　清原宣賢『三略秘抄』と林羅山『三略諺解』の比較検討
第一節　『三略諺解』における清原家批判
第二節　『三略』を対象とする理由
第三節　清原家の抄物
第四節　林羅山の諺解

第二章　『七書直解』のテキストに対する姿勢の比較
第一節　成化二十二年版と嘉靖十六年版のテキストに問題がある場合
第二節　清原宣賢がテキストを改定している例
第三節　林羅山のテキストに対する姿勢

第三章　林羅山の『大学』解釈をめぐって
第一節　『大学諺解』と『大学和字抄』
第二節　伝と章句の掲出法
第三節　明代諸書をも含めた新注に拠る解釈
第四節　古注の検討
第五節　解説の繁簡
第六節　人倫を説く

第四章　林羅山の朱子学とその特質について
第一節　藤原惺窩と林羅山の交際
第二節　林羅山が慶長九年三月朔日付書簡にこめた意図について
第三節　藤原惺窩の慶長九年三月十二日付書簡について
第四節　林羅山の慶長九年三月十四日付書簡と同年四月中旬の書簡について
第五節　林羅山の王守仁理解と『知新日録』について
第六節　朱熹と王守仁に連続性を見出す態度
第七節　程・朱・王の総合
第八節　程朱尊重を基調とする学説上の取捨選択

後編　寛永末年からの林羅山と編纂事業
第五章　五山文学批判と博への志向
第一節　長男林左門の死と碑銘に記された学習階梯
第二節　林鵞峯の学習階梯と五山文学の影響力
第三節　林讀耕斎の学習階梯
第四節　林左門の学習階梯

第六章　林羅山の学問とその特質について
第一節　獲得した知識の運用方法
第二節　林羅山が子に与えた対策
第三節　寛永十年代後半からの徳川幕府による編纂事業と林家親子
第四節　経書の記述とその齟齬の縫合
第五節　六経の尊重

第七章　『本朝神社考』上巻の構成について
第一節　『本朝神社考』のテキストについて
第二節　『本朝神社考』編纂の目的と方針
第三節　『本朝神社考』上巻の構成について

第八章　徳川幕府の宗教政策と『本朝神社考』との連動について
第一節　慶長年間から寛永年間にいたる徳川幕府の宗教政策
第二節　林羅山の神仏習合批判
第三節　林羅山の天皇批判
第四節　二十二社に含まれない神社

第九章　修史事業から窺う林羅山と林鵞峯の差異
第一節　『本朝編年録』編纂の経緯
第二節　『本朝通鑑』編纂の経緯
第三節　『本朝編年録』および『本朝通鑑』草稿について
第四節　『本朝通鑑』編纂の方針と林鵞峯の認識
第五節　壬申の乱に関する記述から窺う林羅山の「勧懲の意」
第六節　治承・寿永の東西両朝に関する記述から窺う林鵞峯の「勧懲の意」
第七節　南北朝に関する記述から窺う林羅山と林鵞峯の差異

結論
文献目録
図表
資料翻刻

本論文の各章の内容は次の通りである。

序論

最初に林羅山に関する問題意識を三つ挙げている。第一に、林羅山の学問は近世期に突然生まれたものではなく、五山・博士家など中世儒学との交渉のなかから生まれたものであるから、五山・博士家など中世儒学や藤原惺窩との比較検討を通してその学問の形成と特質を明らかにする必要がある。第二に、林羅山の著述は幕府政策と密接に関連することから、林羅山の著述がもつ意味を正確に読み解くためには、幕府の動向と林羅山の関係に十分配慮する必要がある。第三に、林羅山の学問は林鵞峯に継承されたことから、後継者林鵞峯の学問・業績と比較検討することによって、林羅山の学問・業績の限界と鵞峯による継承の内実を見定める必要があるとする。

また、従来の羅山研究に関しては、日本思想史分野からの研究が大きな成果をあげてきたことや、日本文学研究者鈴木健一の研究が中世から近世への展開の中で捉える視点を評価しつつも、その一方で中国古典学の立場からの研究が不足していることを指摘する。そして戦前の安井小太郎による概説を評価し、近年の大島晃らの中国古典学的アプローチを重視することによって、自身の研究姿勢を明示している。

また、より対象に接近して立論するために、林羅山自身に縁の深いより価値の高い資料

を使用したと述べている。

第一章　清原宣賢『三略秘抄』と林羅山『三略諺解』の比較検討

本章では、林羅山の古典解釈と清原家の古典解釈の方法論をめぐって、清原家が代々「抄物」などによって継承してきた高いレベルの学問を羅山は十分に咀嚼した上で、その古注・新注を折衷するような清原家の学問のあり方が恣意性に陥り易いことを羅山が指摘しており、そうした恣意性を回避するために羅山自身は諸注を混用せずに一つの注釈によって一貫した解釈をしていることを明らかにしている。羅山自身の自覚的な言葉と、宣賢・羅山それぞれの注釈書の具体的な理解を通して、中世の「抄物」の方法的な限界を超えようとする営みから林羅山の古典解釈が生まれ出てきたことを明らかにしている。

第二章　『七書直解』のテキストに対する姿勢の比較

清原宣賢『三略秘抄』と林羅山『三略諺解』に関して、両者がそれぞれ参照した底本、或いは参照した可能性がある底本を確定したうえで、底本の本文と対校作業を行い、両者が底本にどのような改定を行っているか、或いはいないかを明らかにしている。『三略秘抄』の本文には清原宣賢の私見によって改定されている箇所があり、その高い見識を示しつつも恣意性に陥る可能性があるのに対して、林羅山は誤字と思われる箇所も改めずに残しており、羅山のほうがより底本に忠実であると論じている。

第三章　林羅山の『大学』解釈をめぐって

林羅山の『大学』注釈書に、漢字平仮名交じりの『大学和字抄』と漢字片仮名交じりの『大学諺解』があることに着目し、両者の内容を比較してその性格の違いを明らかにしている。将軍家光のために説かれた前者が人倫を説くことを主にして平易に解説されているのに対して、聡明な長男の夭折後に鵞峯を後継者として育てるために著された後者は、朱注を基本としつつも古注や明代注釈書にまで目配りした専門的な内容になっていると論じている。

第四章　林羅山の朱子学とその特質について

林羅山の朱子学理解の特質を明確化するために、羅山が師事した藤原惺窩との往復書簡を材料にして、両者の朱子学に対する理解の違いを明らかにしている。惺窩・羅山にとっての朱子学が陽明学の存在を前提としたものであったとの先行研究を踏まえつつ、羅山が『四書知新日録』を通して早くから陽明学に関する知識を持ち、かつ陽明学解禁後の明末の思想状況について概括的認識を持っていたことを論じ、また羅山が「良知」が王陽明以前に『四書大全』等に見えると述べていることを指摘する。つまり、惺窩が複雑化した明末思想界を朱陸の一致において概観しようとしたのに対して、羅山はあくまで朱子学の思想体系の中に位置付け得るものとして陽明学を理解しようとしたことを明らかにしている。

第五章　五山文学批判と博への志向

林羅山が子弟に課した読書の階梯や林左門・林鵞峯の読書歴を通して、羅山が五山僧の詩文中心の狭隘な学問を批判し、経学を中心とした博学を主張したこと、しかしその主張にもかかわらず実際の学習には五山僧が重視した詩文の学習がなお多分に含まれていたことを論じている。

第六章　林羅山の学問とその特質について

徳川家康の下問に答えた林羅山の「対策」を例に、幕府儒官が権力者からの下問に即座に応答することを課せられている存在であることを指摘し、こうした儒者のあり方から林羅山の博学と経学との関係を説明している。また、林羅山が林鵞峯に対してそうした任務を果たしうる学識を修得させるべく「対策」を課したことを取り上げ、様々な下問に対応しうる判断力を涵養するためにこそ経学が最重要であり、その上で博学や詞章の修得を説いていることを明らかにしている。

第七章　『本朝神社考』上巻の構成について

林羅山の学問的特徴を表すもう一つの側面である幕府の編纂事業との関わりを明らかにするために、『本朝神社考』を取り上げて、その上巻に収録される主要神社二十二社の序列が従来の神道における序列とは大きく異なるものであり、林羅山の独創にかかるものであることを論じている。

第八章　徳川幕府の宗教政策と『本朝神社考』との連動について

林羅山の『本朝神社考』の内容が、同時期の徳川幕府による寺社統制、朝廷と寺社の分断と密接に関連することを論じている。羅山は本地垂迹を否定して神仏分離を主張し、その批判は従来神仏習合を許容してきた歴代天皇にも向けられているとする。羅山が新たに作りだした神社の序列は、武家の崇敬社である鶴岡八幡宮に伊勢神宮と石清水八幡宮に次ぐ序列を与えたことが端的に示すように、世俗の秩序をそのまま反映したものであったと論じている。

第九章　修史事業から窺う林羅山と林鵞峯の差異

林羅山が幕府から命じられて編纂に着手しつつも完成に至らなかった『本朝編年録』と、林鵞峯が再び命じられて完成させた『本朝通鑑』を比較検討して、両者の差異について論じている。王朝の正統性と名分に対する難しい判断が求められるような、壬申の乱、治承・寿永の両朝、南北両朝等の記述に関して、羅山の段階ではその記述が率直に過ぎる面があること、鵞峯においては名分論に基づいて明確に立場を打ち出しつつも細心の注意を払って記述していることを明らかにしている。

論文審査結果の要旨

序論において述べられた問題意識の三つのうち、第一の中世儒学と林羅山の学問との関連に関しては、第一章・第二章・第三章において清原家の抄物との関係が丹念に追及され、明らかになった部分が多い。従来の羅山研究ではこの点はあまり明らかにされておらず、中世末期から近世初期の学術史の流れの中で林羅山の学問の特質を描き出しえた点が、本論文の特色でありまた優れた点である。この問題意識は、羅山の近世性を追求する戦略として、「直解」や「諺解」、「講義」、「大全」、「蒙引」といった一般的啓蒙的テキストを主な分析対象としていることにも現れている。藤原惺窩と林羅山の学問の性質の違いについても、第四章において論じた陸王学理解の方向性の違いをめぐる議論は、新見解の可能性が示されたと言えるだろう。末尾に「図表」として附された羅山の和文体注釈書とそれが参照した漢籍注釈との対校作業などは、本論文が基礎的な文献調査の蓄積の上に立論されていることを示すものであり、こうした点も評価に値する。

問題意識の第二にあげられた、著述背景の十分な把握に基づく林羅山著述と幕府政策との関連という点に関しては、第三章の『大学和字抄』と『大学諺解』の比較や、第六章の「対策」、第七章・第八章の『本朝神社考』、第九章の『本朝通鑑』において具体的に論じられており、それぞれ妥当性のある叙述になっている。

問題意識の第三としてあげられた、林羅山から林鵞峯への学問継承から羅山の学問を捉えなおすという点に関しても、第六章の「対策」において基本的特徴が明らかにされた上、第九章の修史事業において最も詳しく論及されている。

更に望むべき点を挙げれば、幕府政策との関係から林羅山を論ずる場合に、外交問題などへの言及は逸することのできない課題である。また漢籍注釈や公的編纂物が考察対象となったため、これ以外の林羅山の和文著作にはあまり配慮されていないので、日本文学研究分野の成果への配慮ともども今後の課題とすることが望まれる。なお、これらの課題については、口頭試問におけるやりとりの中で、既に視野の中に入っていることを確認した。

本論文は林羅山の学問を、江戸期以前の博士家の学問と江戸期以降の経学との結節点に位置付けて、従来の日本思想史分野の研究ともまた中国思想史分野の研究とも異なる二者を総合する研究方法によって、その形成と特色を論じた点に特徴が認められる。今後更に克服すべき課題を含みつつも、全体として林羅山の学問を古典学の立場から評価するという所期の目的が実現されており、その具体的な論述には少なからぬ新知見が含まれている。またこの論述によって林羅山の学問がどのように形成され継承されたのか、またそのように形成され継承された林羅山の学問がどのような特質をもつものであったかが相当程度明らかになっている。

したがって、論文審査委員は、全員一致して本論文が「博士（日本漢学）」（甲）の学位を授与するに値するものであることを認定した。

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第　22　集
平成30 (2018) 年 3月15日

発行　　二松學舍大学大学院
編集　　二松學舍大学 教学事務部 教務課
〒102-8336　東京都千代田区三番町６番地16
電話 03 (3261) 7406